比 較 思 想 学 会
第 53 回大会

シンポジウム

要旨

2026 年 6 月 13 日（土）・14 日（日）

会場：大正大学 巣鴨キャンパス

目次

6 月 13 日（土）

シンポジウム①
近代日本の経営思想

1. 松下幸之助の経営と宗教

川上 恒雄（PHP理念経営研究センター） 2

2. 近代日本における女性の修養と経営思想

大澤 絢子（東北大学） 3

3. 一流経営者に学ぶ人間学

藤尾 允泰（致知出版社） 4

4. MSR と日本の経営文化—天理教の救済思想

村山 元理（駒澤大学） 5

6 月 14 日（日）

シンポジウム②
世界哲学における言語の問題

1. 空海の言語哲学：真言とは何か

安藤 礼二（多摩美術大学） 8

2. 口承性、原エクリチュール、言語の権力

中野 裕考（東京大学） 9

3. 哲学を語る言語の形成と変容

納富 信留（東京大学） 10

6 月 13 日（土）
シンポジウム①
近代日本の経営思想

松下幸之助の経営と宗教

川上 恒雄（ＰＨＰ理念経営研究センター）

松下電器（現パナソニック）グループの創業者である松下幸之助（1894-1989）は、家庭電化の普及に貢献した経営者として知られるが、様々な宗教・宗派と接点を持った人物でもある。その観点から、幸之助の経営思想について考えてみたい。

一般に経営と宗教との関連については、学術的か否かを問わないと、すでに多数の文献が存在する。扱っているテーマは、経営者（実業家）の価値意識や精神修養、従業員（労働者）の意欲向上や忠誠心涵養、経営理念の表現やその実践――などが目に付く。幸之助についても例外ではなく、これらすべてのテーマについて、宗教・修養団体やその関係者から、程度の差はあれ、何らかの影響を受けているのではないかと推察される。

一方、幸之助に特徴的だと思われるのは、経営の意義や価値についての見方を、宗教的ともいえる世界観から深めたことである。神的存在である「宇宙根源の力」から説き起こすその説明の仕方は、経営学の教科書にはおよそ採用されない（実証不能な）ものではあるが、近代学校教育をほとんど受けていない幸之助にとっては、特段の疑問なく発想されるものであったようだ。

幸之助と宗教と言えば、1932 年、天理教見学をきっかけに、無尽蔵の生産によって貧困の克服をめざす「産業人の使命」（後に「水道哲学」と呼ばれる）を確信したことがよく知られている。ただし、この「使命」自体がとりたてて宗教的であるわけではない。幸之助自身は言及をしていないものの、昭和恐慌による貧困問題を背景とした実業家批判の高まりとも関係しているのかもしれない。

もっとも、その後に幸之助が宗教への関心を深めたのは確かである。戦争の時代を経て、一企業体の枠を超え、人間一般の存在意義や使命の探究に取り組み始めた。戦争などで相争うことが人間本来の姿ではなく、多様な特性を持つ個々人が互いに協力して宇宙万物の生成発展に順応するのが本分だという。その論理は暗に、企業経営こそがその役割を大いに果たしていることを示唆している。

生成発展する宇宙における人間の役割に焦点を当てる見方は、やや形を変えて、京セラグループ創業者の稲盛和夫に引き継がれる。両者の共通点の一つは利益をあげることに厳しいことだった。しかし単なる利益至上主義に陥らなかったのは、利益を使命実現の指標とみなしたからだ。すなわち利益は使命遂行のための原資になるとともに使命実現に対する報酬にもなる。日本には元々「先義後利」という考え方があったが、それを独自に再解釈し、経営の価値を、著作などを通して訴えたのが、幸之助であり、稲盛であった。

近年は株主至上主義の反省もあって、パーパス（企業の社会的意義）の策定が日本企業でも流行したが、逆に過剰ともいえるほど流行したのは、それを受け入れる素地が多くの日本企業ですでに根付いていたからだろう。

近代日本における女性の修養と経営思想

大澤 絢子（東北大学）

本報告は、大正 7（1918）年に社会教化団体・希望社を設立した後藤静香（1884～1969）の修養思想に着目し、女性労働者（工女／女工）の自己形成と経営思想との関係性を検証する。

修養とは、主体的に自己の精神や品性を養い、その向上に努める思考や行為をさす。日本において修養は、サミュエル・スマイルズの *Self-Help* の翻訳である中村正直の『西国立志編』の普及を契機に、既成宗教の枠に収まらず個人が精神面の向上を目指す自発的な実践として大衆化した。近代日本社会における自己形成はこれまで、男性エリート層中心の教養主義や、男性のノン・エリート層の立身出世主義の視点から取り上げられることが多く、女性に関しては高等女学校進学者や都市部の主婦などの良妻賢母教育に軸が置かれてきた。

一方、本報告の焦点は、教育機会から疎外され、工場等で働いた女性たちである。後藤は修養雑誌『泉の花』を通して、彼女たちに働きながら自分を高める重要性を説いた。元女学校教員の後藤静香は、明治 39（1906）年に蓮沼門三が創設した修養団で幹事長を務めた人物である。「流汗鍛錬」を掲げた修養団には、渋沢栄一をはじめ財界有力者の支持が集まり、修養は労働者の自主的な勤労と生産性向上を結びつける精神性として企業等の集団のなかでも醸成されていった。

女子修養団を意図して希望社を立ち上げた後藤は、大正 13（1924）年に『泉の花』を創刊する。同誌は書店を介さない直接販売にも関わらず、低価格な設定と工場による大量購読によって、1929 年には発行部数 58 万部を記録した。

『泉の花』からは、資本主義の要請に応える独自の勤労思想を読み取ることができる。同誌では、ローマ字教育や「高女教壇」欄を設け、進学を断念した女性たちに知を提供し、過酷な労働も自己向上のための試練として再定義している。同誌は「資本主労働者双方の悦び」として、「能率増進・風紀改善・思想善導」の効果を宣伝し、現状への不満を自己研鑽のエネルギーへと昇華させるものでもあった。東京モスリン等の大規模工場が数千部単位で購入していたことからは、同誌が低コストで労働規律を内面化させるための管理技術として評価されていたことがうかがえる。

働く女性労働者の精神指導は、郡是製絲株式会社で従業員教育を担った宗教家の川合信水にも見られる。そこには男性とは異なる教育・労働機会を持った女性独自の自己向上文化があり、働く女性の修養は、労働者の主体的な向上心を汲み取りつつ、近代産業社会を支える精神的基盤へと接合する役割を果たしていたと考えられる。本報告では、修養を資本主義社会における搾取の道具か心の癒しかという単純な二項対立から捉えるのではなく、資本主義の歪みの中にあって、自己を磨こうと働き努めた女性たちと経営思想の交差を考えたい。

一流経営者に学ぶ人間学

藤尾 允泰（致知出版社）

「日本の資本主義の父」と称され、約 500 社もの会社の創業や経営に関与したといわれる渋沢栄一は「道徳経済合一」「論語と算盤」を説いた。その渋沢栄一に影響を与えた人物の一人が農政家の二宮尊徳（金次郎）である。尊徳曰く「道徳なき経済は罪であり、経済なき道徳は寝言である」と。その二宮尊徳が薪を背負って歩きながら読んでいる本が『大学』だ。その一節に「徳は本なり 財は末なり」とある。『大学』は「四書五経」の一つで、2000 年を超える歴史の風雪に耐え、リーダーたちの間で読み継がれてきた東洋古典である。そこには人の上に立つ者の心得として「己を修め、人を治める」ことの重要性が説かれている。人は己を修めた分だけ、人を感化し育てることができる、ということだろう。リーダー、とりわけ経営者にとって、自己修養を通じて「徳」を積むことがいかに重要であるか。数多の先達たちが教えてくれている。

人間学を学ぶ月刊誌『致知』は今年創刊 48 周年を迎えた。「いつの時代でも、仕事にも人生にも真剣に取り組んでいる人はいる。そういう人たちの心の糧になる雑誌を創ろう」――この創刊理念のもと、有名無名や職業のジャンルを問わず、各界で一道を切り開いてこられた人物の体験談、また古典や歴史に凝縮される原理原則を繙くことで、いつの時代も変わらず求められる、「人としてのあり方」を毎号探究している。

私の父親である弊社社長が創刊時から『致知』の編集に携わり、私はその背中を追って、新卒で弊社に入社し、『致知』編集者の道を歩んで満 15 年の歳月が経った。これまで稲盛和夫氏、山中伸弥氏、栗山英樹氏をはじめ、取材を通じて約 1,000 名の一流プロ、人生の達人たちにお逢いしてきた。その方々に共通していると感じる点は数々あるが、ここでは 2 つだけ紹介したい。一流プロの共通点。これは職業のジャンル、年齢、性別を問わない。あらゆる一流プロに共通しているものは何か。

一つは「目の前に与えられた仕事や環境に、愚痴や不平不満を言わず決して手を抜いたり投げ出したりせず、一心不乱・無我夢中に打ち込む。その姿勢を何年も続けていくと、どこかで誰かが必ず見ていて、引き上げてくれる。そして、天をも味方につけ、自分では思いも寄らない成功や幸福に辿り着く」ということ。もう一つの共通点は、一流の人は「学び続ける」。どんなに高い名声を得ても、どんなに深い心境に達しても、決して満足したり、慢心したりすることがない。どこまで行っても、「これでいい」というゴールはなく、「まだまだ、もっともっと」と謙虚・素直に学び続ける。

シンポジウムでは、松下幸之助さんと共に「経営の神様」と仰がれる京セラ創業者・稲盛和夫さんから直接学んだこと、具体的なエピソードや言葉を交えながら、これらの共通点を掘り下げていく。

MSR と日本の経営文化−天理教の救済思想

村山 元理（駒澤大学）

電米国経営学会で MSR（マネジメント、スピリチュアリティと宗教）という部門が正式に認定されたのは近年のことである。社会科学としての経営学に、企業倫理だけでなくスピリチュアリティや宗教の重要さが認識されてきた背景には世界的に心の経営が求められている大きなトレンドがあることが看守される。スピリチュアリティとは何かを改めて検討しながら、日本発の経営文化はいかにあるべきかいう課題を考察したい。

大澤（2022）が明かしているように、近代以降の日本資本主義を理解するうえで、「修養」という概念がキーワードとして注目を浴びている。精神の涵養という大きな枠組みでとらえると、修養という言葉は日本人の心をとらえ続けてきたといる。そして宗教団体だけでなく倫理・修養団体においても目立たぬながらも、底流として日本の経営思想を支えてきたことが分かる。

さて近代に生まれた天理教の思想には修養＝心磨きが救済につながるという実践倫理的な思想があり、倫理・修養団体の隆盛を理解する上でもキーとなる宗教的な真理が啓示思想として明らかにされいてる。

日本資本主義の最高指導者である渋沢栄一(1840-1931)は道徳経済合一説、合本主義などの精神的価値の普及への功績も大きい。他方で天理教の教祖である中山みき(1798-1887)は天保期に立教し、その宗教者としての 50 年の生き神・啓示者としての雛型を残し、明治維新の近代化へとつながる普遍的な倫理思想を開示した。その啓示は二代目の天啓者である本席こと飯降伊蔵(1834-1907)へと継承され、明治日本において最大の宗教運動となった。その啓示思想の中心は「今さえよくば、我さえよくば」という汚れた心の変革を通じた救済思想であり、肉体貸しもの借り物の理という生命観・宇宙観が根本教義となっている。汚れた人間思案は八つの埃に譬えられ、心磨きの対象とされ、信仰、修養の眼目となっている。すなわち、不平不満や不足が多い人間心がいかに生かされているという明るい陽気な心、誠心に変容できるかが信仰的眼目となっている。

丸山敏雄が創設した倫理法人会においても純粋倫理が「みち」として説かれて、天理教が「おみち」と自称している心の道において共通性が見られる。両団体とも明るさや陽気な心を目的とした修養の実践があり、倫理法人会では体系的に毎週のモーニングセミナーにおける共同体において営まれている。多くの経営者の心作りの場を形成しており、日本的な倫理経営、日本的なスピリチュアリティの表現形態として注目できる。

持続可能な企業経営の背後には、実際に掃除を重視するなど修養＝「心磨き」が日本的経営の心の道として特徴づけられるのではないか。本報告では「心磨き」が救済思想の原理となっている天理教の教義「心通りの守護」という視点から未来の日本の経営文化の発信を構想していきたい。その際、伊那食品工業の発展をモデルとして事例紹介する。

6 月 14 日（日）
シンポジウム②
世界哲学における言語の問題

空海の言語哲学：真言とは何か

安藤 礼二（多摩美術大学）

空海は、極東の列島に生まれた人間としてはじめて、インド＝ヨーロッパ語族の一つの祖として位置づけられるサンスクリットを意識的に学んだ表現者である。空海がサンスクリットを本格的に学習したのは当時の世界帝国の中心である唐の都・長安であったと推定される。後に空海が自身の言語哲学の中心に据える「真言」（真なる言語）とは、狭義にはサンスクリットを指す。しかし、唐に渡る以前、空海は、美麗な漢語を駆使した自伝的な著作、『聾瞽指帰』をまとめていた。その際、地名や人名に、いわゆる「万葉仮名」で註記を施している。漢語の音を利用した「万葉仮名」を生んだのは、和語の音韻の体系を完全に理解していた多言語使用者たちであったはずである。おそらくは韓語を母語として朝鮮半島に出自を持った人々たちであり、大乗の仏教を信仰する者たちでもあったはずだ。空海のような個性が生まれたのは、そのような環境からであった。

大乗の仏教が信仰の対象とするのは、人間的な釈尊（ゴータマ・シッダッタ）ではなく、釈尊を含めて森羅万象あらゆるものを生み出す「法身」である。ただし、「法身」は、人間の言語では決して表現することができない姿も形も持たない無相の存在、すなわち無限の存在としてある大宇宙の真理、「真如」であった。空海は、唐で学んだ新たな教え、大乗の仏教を超えると称していた金剛乗の仏教、いわゆる『金剛頂経』系の経典類の助けを借りて、「真言」からこそ「真如」が「流出」すると説いた。「流出」とは、能動でも受動でもなく、自己が自己に再帰的に作用する、いわゆる中動態（アートマネーパダ）として活用する動詞である。多言語使用者である空海は、顕在的で個別の言語活動を可能とする、ある種の根源的かつ潜在的な表現作用を「真言」と捉え直し、「法身」とは、静的で沈黙を守る「真如」ではなく、動的に表現を続ける「真言」であると宣言する。そうした「真言」としての「法身」と一つになることこそが「即身成仏」なのである、と。

唐から帰国した空海は、最澄および徳一からの鋭い異議申し立てに応えるかのようにして、自らの「即身成仏」論をまとめ直していく。『声字実相義』において、地・水・火・風・空の五大、森羅万象あらゆるものは皆響きを発していると説き、それを受けた『即身成仏義』においては、五大に意識作用である識大を加えた六大を「法身」の身体としている。「法身」とは自然であり、自然とは「法身」であった。そこから固有の「私」（我）が立ち上がってくるためには、「法身」からの一方向的な「流出」ではなく、「法身」と「我」との双方向的な「加持」が必要であると記した。太陽が水をあたため、水が太陽によってあたためられるような双方向的な触発作用である。そうした「法身」と「我」との関係は、「真言」と「我」、言語と「我」との関係として言い換えられる。そこに空海の言語哲学の核心が存在する。

口承性、原エクリチュール、言語の権力

中野 裕考（東京大学）

前世紀末頃から、中南米先住民文化に根ざした哲学の模索が盛んになり、域内外の研究者たちの共感と協働を呼んでいる。それはまた、哲学そのもののあり方に関わる、それ自体哲学的な問題に新たな光を投げかける。本発表ではそのような問題の一つ、口承性と哲学の関係を取り上げる。問題自体はよく知られており、二つの有力な議論が前世紀後半に展開されていた。

一方には「口承・読み書き理論[Orality and Literacy theory]」などと呼ばれる陣営があって、口承、読み書き、印刷、電子といったメディア技術の面から思考と文化のあり方を考察してきた。語り手と聞き手が対面し、記憶している知を伝達する口承の文化では、語り手、聞き手、思想内容の間に距離が生まれにくい。社会に文字を介したコミュニケーションが定着することで、書き手、聞き手、思想内容の間の時間的、空間的な隔たりが常態化する。これによって駆動されるのが、自律的な個人による批判的思考、主観的な印象とは区別される真理の探究、つまりは哲学である。

他方では、ジャック・デリダが異なる視点と関心から口承と読み書きの関係を論じている。文字という外在的な思想伝達メディアを媒介しない、思想の主体に対する思想内容の、声におけるまったき現前を仮構し、そこへの還帰として学問を捉える傾向を、デリダは「現前の形而上学」「ロゴス中心主義」と呼び、プラトン以来の西洋哲学の基底に見出した。しかし口承コミュニケーションも含めて意味とは外在性や媒介の介入と不可分であり、むしろそれによってのみ可能である。この根源的な差異化を「原エクリチュール」と呼ぶなら、口承の文化も読み書きの媒介性・外在性と無縁ではない。

両陣営はそれぞれに啓発的であり影響も大きく、しかも西洋の外なる先住民文化との関係で援用されてもきたが、互いにどう関係するのか直ちには明らかではなかった。本発表では、中南米先住民文化に根ざした哲学の可能性を展望するという観点から、口承・読み書き理論に向けられた批判も考慮しつつ両陣営の融和的・統一的読解を試みてみたい。

これによって得られる視点から、発表者がペルーのクスコ周辺で調査している「アンデス哲学」の事例を考察してみたい。理論と実例の往復に基づき、次のような点で問題提起を試みる。「口承→読み書き→印刷→電子マルチメディア」という西洋モデルの単線的、目的論的な発展図式をそれ以外の地域に適用することの不当性。口承文化のただ中で太古から意味伝達を担ってきた物質的記号体系の存在。先住民言語に対する植民者および国民国家のスペイン語、さらにグローバル化時代における英語が振るう、政治経済力および人口規模等に支えられて言語そのものが帯びる権力の問題。日本の状況の捉えなおしにも資する発表ができるよう努めたい。